

# 園外環境の活用と園庭環境の創造を担う 保育者の育成に向けた養成校の試み —三瀬保育園(鶴岡市)での大学生・高校生の合同インターン事業—

下村 一彦・福田 真一・村上 智子

本稿の目的は、保育職を志望する高校生と大学生に、今日の保育の中核的な理念である「環境を通した保育」を探求している保育園でのインターンを養成校が設定することの意義と課題を整理することである。まず、協力園である三瀬（さんぜ）保育園の園外・園庭環境を整理した上で、インターンのプログラム構成と実際の様子を分析した。実際の遊具体験が参加者による保育の理解の深化に効果的だった一方、見学の視点不足など事前指導のあり方が課題として認識された。次に、高校生と大学生のアンケートを分析し、合同で行ったことが有意義な刺激となったことその他、見学・体験・専門家による学びの振り返りを一貫して行ったことで、参加者が自らの子ども観や保育職のイメージを再構成する契機となり、参加者の保育職への意欲や「環境を通した」保育の本質への意識の高まりに繋がったことを示した。

## はじめに

今日、キャリア教育を推進する高等学校には、インターンシップ（以下、インターンと表記する。）の重視が求められているが、公立高等学校におけるインターンの実施率と参加率を調査に基づき分析した藤田は、「ほとんどの高校生は中学校時代に職場体験活動に参加した経験をもっている。しかし、高校生の約7割が在学する普通科においては、職場体験活動で得た学びを深めたり、高めたりするための重要な機会であるインターンシップを経験しないまま高等学校を卒業していく者が大多数を占める」と指摘し、各高等学校の創意工夫を求めている<sup>(1)</sup>。

ところで、近年、保育者の不足が深刻な社会問題になっている<sup>(2)</sup>。給与や勤務時間等の処遇に大きな要因があるといえるが、処遇の悪さが報道等で取り上げられる中で、保育職を選択肢としていた生徒が、インターン等の体験なしに自身の進路を検討しているとすれば、最終的に志望するにせよ、やめるにせよ、望ましいとはいえない。

特に志望する場合は、処遇の悪さも高校生の段階では実感が伴いにくいだけに、キャリア形成のプロセスでの自己決定が非常に曖昧なものになっていることを懸念せずにはいられない。

このような状況において、先行研究（事業）では、大学と高等学校の連携を基に、高校生の体験（インターン）の充実を図っている取り組みがある。

一つは、高校生には「判断材料となる体験の場」と「吟味のプロセスの時間」が必要との観点から高大連携の幼児向けイベントを実施した宮内らの取り組みである。同イベントでは、高校生が遊びの楽しさを再実感したこと、高校生にとって大学生が「モデルとなるべきメンター、さらには“一歩前のメンター”」となっていること、大学生にとっても自らをリフレクティブに捉え直す契機となっていたこと等の成果が報告されている<sup>(3)</sup>。

もう一つは、附属校園の関係性を活かし、高校生に対して5日間の幼稚園実習や大学教員が指導する振り返りの機会を設けた二階堂らの取り組みである。この取り組みでは、「1年次では子どもはかわいい、元気など世間一般の枠で子どもを捉えていたものが、幼稚園という集団の中で実習をしてみて、子どもを指導した中で、子どもの個という存在と尊重することの大切さをプロセスを通して学んだことがうかがえた」と、継続的かつ専門的なプログラムによる高校生の成長、保育者としての意識の芽生えが報告されている<sup>(4)</sup>。

どちらの取り組みも、高校生に貴重な体験・学びの場を提供している。ただし、前者は、子どもと関わること（誘いかけること）を大切に交流型のイベントであるだけに、職業としての保育者を理解する体験としては課題がある。幼稚園や保育園では、保育所保育指針や幼稚園教育要領の総則に示されているように「環境を通した保育」が求められる。当然、その環境には時に遊びを導く保育者も含まれるが、「施設や遊具などの物的環境」「自然や社会の事象」などの環境構成や、遊びの本質を理解した保育者の見守る姿勢の重要性を認識していなければ、専門職として子どもの自主性や主体性を育むことはできない<sup>(5)</sup>。他方後者は、学びが深まる要因ではあるが、長期的なプログラムで教育課程・時間割の調整等が求められることから、対象者が附属校園のような特定の高校の生徒だけになるという課題がある。

そこで、本研究では、①高校生と大学生がともに学ぶ機会とすること、②専門家（本事業では全国学会の理事も務める元養成校教員）が高校生と大学生の学びを振り返る機会を設けること、という上記の先行研究で有効性が示されている手法を取り入れつつ、③保育者養成校が3校しかない山形県の状況を踏まえて県内の全ての高校の生徒を対象にすること、④環境を通した保育を実践している園の保育を学ぶことで、先行研究に対して本研究が挙げた課題の解消に努めるインターン事業を実施する。

なお、本研究において最も重要なのは、会場園の選定である。今回、鶴岡市の三瀬保育園に会場を依頼したのは、第一章で詳しく述べるように、県内では他にない独創的な園庭と徒歩圏内の自然環境があることが大きい。特に園庭の遊具が殆ど手作りであること、その環境を整備して保育者は見守りと共感を大切に保育を目指していることがある。また、こども環境学会の園庭研究会の会場になったこともあり、同時に多数の見学者を受け入れられることもある。

本稿では、以上の観点から2016年8月3日(水)に実施した三瀬保育園でのインターン事業を参加者の様子やアンケートから検証し、意義や今後の課題を整理することを

目的とする。構成は以下の通りである。

第一章では、インターン事業の会場園である三瀬保育園の環境を日頃の保育の様子を含めて整理する。第一節では園外環境、第二節では園庭環境をまとめる。

第二章では、インターン事業の成果と課題を整理する。第一節では、インターン事業のプログラムの概要と実際の様子をまとめる。第二節では高校生、第三節では大学生に行ったアンケートの結果を基に、インターン事業の成果と今後への課題を明確にする。

## 第一章 三瀬保育園の環境と保育

### 第一節 三瀬保育園の園外環境

三瀬保育園は、鶴岡市の沿岸部、市街地からは車で15分程（高速道路で1区間）の場所にあり、2016年度の定員は60名（4月1日時点の在園児59名）である。同園では、園庭整備が全国的に注目されており、本インターン事業でも子どもの様子を見る時間帯を園庭での保育に設定していることから、参加者の関心も園庭環境に集まることが想定されるが、同保育園には豊かな里地里山も徒歩圏内にある。

ところで、園外の保育では、子どもにとっての継続性、すなわち、挑戦に際しての葛藤（やるかやらないかの迷いや途中でやめる判断など）や遊びの深化等を、園庭のように保育者が意図的に保障しきれない反面、里山や海岸等の自然が持つ応答性の豊かさに、人工的で限られた空間の園庭は及ばない。したがって、園外保育の活用・充実と園庭の環境構成は、子どもに保障したい遊びの要素を補完し相乗しあうものである<sup>(6)</sup>。実際、三瀬保育園でも、春から秋には週に1回は海や山でデイキャンプ（昼食や午睡もテント等で行う日帰りキャンプ）を継続して実施している<sup>(7)</sup>。

以上の観点から、インターン参加者には、園外保育での自然体験の魅力も感じられるように園外の見学・散策の時間も設けており、本節では、その里地里山の環境や保育の様子を整理する。

#### (1) 気比（きひ）神社

園から平坦な道のりで約1キロのところにあり、春には様々な花が見られる。【写真1】の広大な寺社林や【写真2】の沼地がある。



【写真1】寺社林



【写真2】神社の沼

#### (2) 八森山（はちもりやま）

【写真3】のような緩やかな登り道で園から約4キロのところに、【写真4】の広場・斜面（スキー場）がある。夏のデイキャンプでは【写真5】のように、ヒュッテ（山小屋）に保管してある園のキャンプ道具の設置を園児が手伝う。なお、【写真6】の落ち葉のお面での遊びの他、園児は山菜や木の実など食べられるものを集めたりしながら登り、【写真7】のように降雪期でも徒歩で登る（年度末には2歳児クラスも

全行程を3時間ほどかけて散策しながら歩いて登ることがある)。冬の八森山の主な活動は、【写真8・9】の尻滑り（2・3歳児クラス）や【写真10】のスキー（4・5歳児クラス）である（スキーを重視する日には園のワゴン車で送迎する等、柔軟な園外保育のプログラムが組まれている）。スキーでは基本的に板を担いで登って滑るを繰り返すが、上達が見られる園児は、【写真11】のようにヒュッテ管理人のスノーモービルに乗せてもらい登ることもある。



【写真3】 八森山の道



【写真4】 夏の八森山



【写真5】 キャンプ準備



【写真6】 みちくさ遊び



【写真7】 冬の山道



【写真8】 尻滑り①



【写真9】 尻滑り②



【写真10】 ショートスキー



【写真11】 スノーモービル

### (3) 三瀬海岸 【写真12】

園から約1キロのところであり、1歳児の頃から海岸でのデイキャンプを経験する【写真13】。砂浜での遊びの他、6月頃には【写真14・15】のように膝位まで水に浸かって遊ぶ。【写真16・17】は8月に4・5歳児クラスの園児がライフジャケットを着て海水浴をしている様子だが、波が穏やかな日であれば2・3歳児クラスも同じように遊ぶ。



【写真12】 三瀬海岸



【写真13】 1歳児



【写真14】 魚捕り



【写真15】磯遊び



【写真16】海水浴



【写真17】海水浴（拡大）

以上のように、三瀬保育園は徒歩圏内にある園外の自然環境に恵まれ、それらを活かした保育を行っており、インターン企画では、(2) 八森山と (3) 三瀬海岸の見学と散策を組み入れた<sup>(8)</sup>。

## 第二節 三瀬保育園の園庭環境

本節では、三瀬保育園の園庭環境を整理する。同園では、2015年度から園内環境の見直しと自由保育<sup>(9)</sup>への移行を進めており、子どもの主体性を尊重する上で最も重視した園庭は、1年半の間に全く別のものとなっている<sup>(10)</sup>。【写真18】にあるように、かつては典型的な屋外遊技場：鉄製遊具（登り棒・鉄棒・雲梯など）が周囲に点在する平坦な空間<sup>(11)</sup>であり、降雪期には駐車場になってしまっていたものが、【写真19】にみられる立体砂場・築山・タワー・コースなどで構成された<園庭>に生まれ変わったのである<sup>(11)</sup>。

本稿の趣旨を踏まえ、高校生や大学生の印象に強く残ると思われる遊具を以下に4点挙げる。



【写真18】2015年1月の園庭



【写真19】2016年5月の園庭

一つ目として、【写真20】の三段砂場は、6メートル四方の1段目からピラミッド状になっており、1段が約40センチある。深さがあることで掘ることも楽しめるし、段差により【写真21】の水の流れ等が生まれ、砂遊びがダイナミックなものになっている。他方、【写真22】の2メートル四方の小砂場も設けられており、未満児を中心に落ち着いた砂遊びもできるようなっている。



【写真20】三段砂場



【写真21】水路遊び



【写真22】小砂場

二つ目として、直径6メートル、高さ2メートルの築山がある。この築山には【写真23】の丸太の坂やタイヤ階段、地肌がむき出しの斜面、水路などがあり、1歳児も

登って遊んでいる。【写真24】は、正面を向いて丸太階段を降りることに葛藤した2歳児が、地肌の斜面を滑り降りることを選択した様子なのだが、この築山では、1・2歳児を中心に子どもが的確に怖さを感じている様子、自分の能力と相談している様子をよく観察することができる。また、【写真25】は築山に埋め込まれた全長6メートルのボックスカルバート（断面が四角の土管）の内部である。周囲の視線が遮られる空間として、また、後述するコースの一部（トンネル）として機能している。



【写真23】 築山丸太の坂



【写真24】 築山滑り下りる



【写真25】 築山内部

三つ目として、築山などの周囲を巡るコースがある。ストライダー、三輪車、ベルグ社のスクーター、トンカ社の鉄製ダンプカー等が自由に使えるよう駐輪されている園庭では、【写真26】のように、思い思いの乗り物で、異年齢の子どもたちがレースや回遊を楽しんでいる。また、ストライダーに関しては雪用アタッチメントも準備されており、【写真27】のように冬も園庭で遊び込まれている。さらに、回遊性はコースに止まらない。従来から園庭の隅にあった雲梯を築山と繋がるように移動させたことで、【写真28】のように雲梯がコースを跨いで柿の木に続く空中通路となっている。



【写真26】 異種・異年齢レース



【写真27】 雪ストライダー



【写真28】 雲梯

四つ目として、一番高い床面の高さが5.5メートルある【写真29】の3層タワーがある。このタワーには階段や梯子はなく、【写真30・31】のように握力と足の指で体を支えるロープ登り、もしくは【写真32】の一本橋（丸太を組み合わせており、最も細いところは直径約20センチ）を渡らないと登れない。なお、【写真32】の手前の一本橋が初級、【写真24】の築山の本橋が中級、【写真32】のタワーに続く一本橋が上級となっている他、【写真33】の高さ2.4メートルの2層の小タワーのように、難易度の高い遊具には年齢の低い子どもも楽しめる設定のものや、後の挑戦に向けたファーストステップとなるものが別に設けられている。また、【写真33】の小タワー内がごっこ遊びの拠点になっているように、子どもが落ち着いて遊び込める設定も重視されており、【写真34・35】のように屋根の上での休息も想定した屋台が3基設置されている。



【写真29】3層タワー



【写真30】ロープ登り



【写真31】足の指



【写真34】屋根



【写真32】一本橋



【写真33】小タワー



【写真35】屋台

以上のような独創的な園庭が創造され、改善や遊具の新設が継続している背景には、地域との協働、特に地場産業や高齢者との繋がりや、保護者との連携、また保育が大きく変わる中での職員研修など、地方の小規模園のモデルケースとなりうるものがある。地元就職志向の強い保育職志望者にとって、地元山形にあり、独創的な環境と不断の保育の向上を目指す園の存在を知ることは、在学中に加えて就職後、たとえば他の園に就職しても保育を学び続ける上でモデルや支えになると考えている<sup>(12)</sup>。

## 第二章 三瀬保育園でのインターン事業

### 第一節 インターン事業でのプログラムの概要

今回のインターン事業では、村山地方の高校からの参加者と大学生が学園バスを利用して参加する移動時間を考慮して、10時20分から15時30分までの約5時間のプログラムとした。プログラムの設定は、文末に掲載した【参考資料1：県内の高校向けチラシ】にも示しているように、以下の構成と時間配分とした。

- (1) 園庭での保育見学 1時間
- (2) 高校生と大学生の昼食交流、及び園児のいない園庭の遊具で遊ぶ 1時間30分
- (3) 園外環境（三瀬海岸・八森山）の見学・散策 1時間
- (4) 園庭整備と園内研修の外部講師を務めている木村歩美氏の講演会 1時間30分

なお、上記の構成には、子どもの主な活動時間帯である午前中に園庭での遊びの様子を見学すること、高校生も大学生も実際に体を動かして楽しみながら（声を出しながら）園庭を体験する（遊ぶ）のは園庭に園児がいなくなり午睡が始まる前の時間帯であること、午睡の始まる頃は園外での研修とすることで子どもへの刺激を減らすことといった意図と配慮がある。以下では、上記（1）～（4）のプログラム毎に参加者の様子などを整理する（以下の時刻は実際の時刻を記載している）。

(1) 園庭での保育見学 10時過ぎ～11時過ぎ

保育見学では、まず【写真36・37】のように、タワーや一本橋といった他園ではあまり見ることのない高さや難易度の遊具で遊ぶ子どもに注目する様子が見られた。そして、暫くすると【写真38・39】の水遊びや屋台でごっこ遊びをする子ども等、それぞれの参加者が関心を持った場所を見学していたのだが、この保育見学では二つの課題を感じた。

一つは、見学の視点である。【写真38】の小川では、その後、小川にジャンプして入る1歳児が現れる。その1歳児はひとしきりジャンプしての水しぶきを楽しんだ後、水の流れに興味を持ち、築山の雑草を少しむしっては流し、葉っぱが流れる様子をゆっくり追いかけていた。園庭に求められる要素は挑戦等を通じた体力的な遊びばかりではなく、自然物との対話・創意工夫もあり、まさにこの1歳児の小川での葉っぱ流しは自然との対話を通して「センス・オブ・ワンダー<sup>(13)</sup>」を高めている時間なのだが、執筆者の見た限り、周囲にいた参加者は、ジャンプして水しぶきを上げていたところまでしか気に留めていなかった。確かに、ダイナミックな動きや、【写真39】のように複数の幼児が集まっているところは気になるが、一人で環境との対話を楽しみながらじっくり遊び込んでいる姿にも目が向いて欲しい。保育職に就く前の高校生・大学生に対して過大な要求かもしれないが、見学時の視点育成は、インターンでの学習を深化させる上で執筆者が向き合わなければならない今後の課題である。

もう一つは、見学のルールの徹底である。参加者には、見学前に①決して励ましたり挑戦を煽ったりしないこと、②むやみに言葉を掛けて関わろうとしないこと、③子どもにとって存在が気になる距離には極力入らないこと、④子どもから話しかけられたりした場合は応答すること、を口頭で伝えていた。殆どの参加者は、これらの注意に気を配ることができていたが、ままごと等で遊び込んでいる幼児に言葉を掛けて関わろうとする参加者（お客さん役を子どもから求められて応じた参加者を問題視しているのではない）や、【写真40】の小タワーから降りる途中で止まっている3歳児に大丈夫か言葉を掛ける参加者がいた。子どもの遊びを邪魔してしまう可能性や、集中が途切れて怪我をする危険性が感じられたため、保育見学の時間を当初の予定より短くしたのだが、後述するアンケートの中でも、何人かの大学生が、子どもと関わろうとすすめる高校生に違和感や不安を感じていた。事前に授業等でも保育見学のあり方



【写真36】 ロープ登り



【写真37】 一本橋の3歳児



【写真38】 以上児の小川



【写真39】 1歳児の水遊び



【写真40】 降りる3歳児



を周知徹底できる大学生に比べて、見学前の僅かな時間に口頭で留意事項を高校生に伝える難しさを感じた。今後は、参加申込の受理を通知する際に、見学時の留意事項を文章で郵送して事前の周知にも努めるなど、丁寧な対応が必要である。

(2) 高校生と大学生の昼食交流、及び園庭の遊具で遊ぶ 11時30分～13時

遊具体験では、まずは自分が関心を持ったところで自由に遊んでみるように促した【写真41】。高さや難しい登り方への挑戦に保育見学時から関心が高かったように、【写真42】の上級一本橋や【写真43】の3層タワーで遊ぶ姿がよく見られた。加えて、高校生や大学生なりの挑戦として、一本橋では跨るのではなく、立って渡る等の姿が見られた。なお、【写真44】はタワーの1層目から砂場への約1メートル70センチの飛び降りの様子である。普段からその高さに飛び降りるかどうかを葛藤する幼児の姿もよく見られるが、【写真45】のように、高校生・大学生も躊躇う姿が見られた。挑戦や葛藤など、園庭環境を通しての子どもたちの成長を、自身も同様の怖さや自己能力の判断を体験することで深く理解できたと思われる。



【写真41】  
好きなどころで遊んでみる



【写真42】  
立って上級一本橋



【写真43】  
タワー登り



【写真44】  
タワー飛び降り



【写真45】 高さに躊躇う

次に、コースでのタイヤ系遊具の遊びや、運動会種目も体験して欲しいとの思いから、執筆者が提案し、希望者が参加する形で、タイヤ系遊具のリレーを10人程の高校生・大学生と行った。【写真46～49】にあるように、三輪スクーター、二輪スクーター、ダンプの三種類で行った。特に姿勢がきついダンプ押し（雑巾がけをするのと同じ効果）を交えたチーム戦に参加者の真剣さも高まり、【写真50】のように力を出し切ったゴールの様子も見られた。体験してみないと分からない体の使い方（筋力の発達を自然に促す動き）や面白さを感じられたと考えている。

なお、【写真51】は昼食前に縁側の水道で足を洗っている様子である。三瀬保育園の園庭では、靴を履くことも子どもの選択に委ねており、冬季以外は裸足で遊ぶ子どもが多い。これも是非体験して欲しいとの思いから、裸足になってみることを提案したところ、全員が裸足になり遊んでおり、第二章第二節で後述するように、高校生の記憶にも強く残ったようである。



【写真46】三輪スクーター



【写真47】スクーター



【写真48】ダンプ押し



【写真49】異種レース



【写真50】全力でゴール



【写真51】裸足で遊ぶ

【写真52】は高校生と大学生が交流しながらの昼食の様子である。大学生に高校生と一緒に食べるよう事前指導していたこともあるが、高校生だけ・大学生だけのテーブルはなかった。なお、昼食をどこで食べるかも参加者に任せた。【写真53】のように園庭を見ながら日陰の縁側で食べる姿も見られたが、暑かったこともあってか、タワーや築山の上で食べる参加者はいなかった。



【写真52】室内で昼食交流



【写真53】縁側で昼食交流

### (3) 園外環境（三瀬海岸・八森山）の見学・散策 13時～14時10分

時間の制約があるため、【写真54】のように学園バスに参加者全員が乗り、八森山【写真55】と三瀬海岸【写真56】を訪れた。八森山ではゲレンデを駆け上がり、三瀬海岸では裸足になって波打ち際で戯れる様子が見られ、園外保育の自然環境の開放感を楽しんでいる様子うかがえた。

なお、移動のバスの中で、子どもたちは多くの場合徒歩移動していること（八森山までの歩く距離を感じて欲しいこと）や、季節毎の楽しみ（スキーや山菜採取、磯遊び等）、自然体験の意義や保育者の役割を執筆者が解説した。



【写真54】バス移動



【写真55】八森山スキー場



【写真56】三瀬海岸

#### （４）木村歩美氏の講演会 14時20分～15時40分

【写真57・58】にあるように、保育園のホールで講演会を行った。保育園の保育士も加わった講演会では、炎天下での活動後、5時間に及ぶプログラムの最後にも拘わらず、【写真59】のように、メモを取りながらの真剣な受講の様子が最後まで見られた。

木村氏の講演会では、前掲の【写真29】のタワーの最上階に登りたくて練習・挑戦を繰り返し、登ることができる4歳女児の登り方を真剣に見つめる5歳男児の様子が写真を交えて提示され、①挑戦できる、怖いと感じられる、でもハザードは除去されている環境の重要性、②観察力を含めた子どもの力、③そこで求められる保育者の姿勢が語られた。



【写真57】 ホールで講演会



【写真58】 木村歩美氏



【写真59】 参加者の様子

以上の5時間にわたるプログラムを終えて、高校生と大学生に無記名のアンケートを実施した。次節以降ではそれぞれの結果から、本インターン事業の成果と課題を明確にする。

#### 第二節 高校生のアンケート結果

本事業に参加した高校生は21人（県内15高校）である<sup>(14)</sup>。終了後に文末掲載の【参考資料2：高校生用アンケート】を無記名で実施し、20人から回収した<sup>(15)</sup>。以下では、アンケートの結果を整理し、インターン事業の成果と課題を整理する。

まず、参加者の学年と高校在学中の保育関係のインターン経験の有無を【表1】にまとめた。「絶対保育者になりたい」という見出しを付けた高校向けのチラシのタイトルから、保育職を強く志望している生徒が参加していると思われる中であっても、長期休み等で継続的にインターンを行っている生徒はおらず、3年生で2割、2年生で半分の生徒はインターンの経験すらない。私立の養成校では推薦入試が盛んに行われており、本学の推薦入試の面接においても、中学校での職場体験や高校でのインターンのエピソードがよく話されるので、保育職志望者のインターン実施率は高いと感じていた。少ないサンプルとはいえ、ある程度明確な進路意識を有している生徒の結果だけに、本稿の意図するインターンの質的向上だけでなく、量的保証も並行して考えていく必要があるといえる。

学年	ある	ない
3	10	3
2	3	3
1	0	1

【表1】 参加者の学年別インターン経験

次に、参加者の企画に対する評価（満足度）については、4段階の総合評価では「大変満足」が17人、「満足」が3人で、「大変不満」「不満」を選択した生徒はいなかった。

また、5段階評価とした個別項目においても、大学生との交流、及び講演会で「どちらでもない」を選択した生徒が1人いたが、「大変不満」「不満」を選択した生徒はいなかったことから、インターン事業に対する高校生の高い満足がうかがえる。内容への満足は、参加者全員が、インターンを経て「保育職に就職したい思いが強まった」を選択したことにも繋がっていると考えられる。なお、個別項目での「大変満足」（5段階評価の最高評価）の選択者数が多い順に【表2】に示した。

園庭の遊具体験	18
木村氏の講演会	17
保育見学	17
園外の見学・散策	15
大学生との交流	12

【表2】プログラム別の「大変満足」選択者数（20人中）

上述の2項目で「どちらでもない」を選択した生徒は、総合評価も「満足」に留まっている。当該生徒（インターン経験あり2年生）は、「私の頭の中に‘子どもと関わらない保育の仕方’は正直頭にはありませんでした。子どもから見ての保育士とは何なのか、私たちにとって子どもにとっての言葉の意味など知らないことも学びました。（以下、生徒と学生の自由記述の引用は全て原文ママ、執筆者が部分引用している場合は（中略）（後略）の表記をする）」と自由記述欄に三瀬保育園の保育について述べており、インターンを通しての学びを受け入れようとする思いと、他園でのインターンの経験等で構築しつつあった保育職のイメージの再構成（転換）を迫られたことへの戸惑いが見て取れる<sup>(16)</sup>。なお、イメージの再構成（転換）に関しては、インターン経験のある他の生徒でも見られる。以下の三つの自由記述は、インターン経験のある3年生3人のものである。

- ・「ここまで子供が自由に自分の意見で学び・遊ぶことのできる保育園は初めて見ました。私は子供と積極的に関わる事が‘保育’だと思っていたのですが、子供の意見を第一に考える保育の仕方も立派な‘保育’なんだなと思いました。」
- ・「今まで子ども達と関わる保育しかみてこなかったからおどろきました。危ないことは自分で判断できる力がつくのでとても良いと思った（後略）。」
- ・「初めは子供とずっと遊ぶことが良いと思っていましたが、三瀬保育園を見学させていただいたり、講演をきいたりして、子供が何かをしている時に、話しかけてしまうのではなく、見守ることで、子供に一人で考えさせる大切さを感じました。」

保育観の転換を迫られて戸惑った生徒も、実際に見て、自分で体験したものを、講演会で解説を受けたことで整理できて納得した生徒も、どちらも子ども像や保育職のイメージを自分なりに深めていくきっかけに出会っており、今回のインターンが高校生のキャリアへの意識形成に本質的に寄与できたと考えている。

なお、【表2】にあるように、プログラムの中で生徒の満足度が最も高かったのは遊具体験である。今回の事業に遊具体験を設定したのは、第一義的には、立体的な遊具、タワーや一本橋の難しさ・怖さを体験し、見学時の子どもの挑戦や葛藤への理解を深めて欲しい、リスク（高さへの怖さ等）を感じると無茶はしないことを自身の体験からも認識して欲しいという意図からだった。インターン経験のある3年生の「実際に園庭の遊具で遊んでみて、子どもの気持ちになって体験することができてよかったです。」、インターン経験のない2年生の「自分も実際に遊んで楽しめたし、子ども

の立場になって考えられた。」という自由記述から執筆者の意図はある程度満たされたと考えている。加えて、インターン経験のある2年生の「初めて見た時に素足で外を走り回っている園児がいてとても驚きました。最初は素足で土の上を歩くのに抵抗があったけど、慣れるととても楽しかった。」という自由記述からは、保育者志望者の体験不足を補う効果も見て取れる。保育職に既に就いている人にも言えることだが、保育職を目指す学生・生徒には、遊びの楽しさに共感できる素養が重要であり、その素養を培うには、様々な体験や真剣に遊ぶ経験などが不可欠である。裸足の気持ちよさや楽しさを体験できたのは、三瀬保育園が土木業を生業とする保護者の協力を得ながら園庭の地質改良にも取り組んできたことが大きい。本生徒がこの体験を活かし、園庭の地質にも配慮できる保育者になることを期待したい<sup>(17)</sup>。

最後に、はじめに挙げた先行研究にもあるように、高校生にとって大学生がメンターとなることの意義は大きい。本インターンは単発の企画（2回目以降も検討しているが、同じ参加者で行う訳ではないので、参加者にとって単発の企画）であり、メンターとまでは言えないかもしれないが、【表2】に示したように大学生との交流に一定の満足が見られ、自由記述で大学生との会話が良かったと改めて記述している生徒も3人おり、大学生と合同で行ったことの一定の効果がうかがわれる。

### 第三節 大学生のアンケート結果

大学生は9人（2年生5人、3年生2人、4年生2人）が参加した。全員が保育職希望の学生で、執筆者3名が実習の事前事後指導科目等を担当する中で、意欲があり、高校生とのコミュニケーション能力も期待できる学生を勧誘した。2年生は保育実習IB（施設実習）以外の実習は経験していない段階、3年生は保育実習を全て終え、4年生は保育実習に加えて幼稚園での教育実習も全て終えている段階である。

文末掲載の【参考資料3：大学生用アンケート】にあるように、匿名性を担保するために大学生には学年を問う項目を設定しなかったことから学年は不明だが、2人は大学在学中のインターン経験がない。大学の授業や進路ガイダンスではインターンを強く推奨しているだけに、高校生だけでなく、大学生にとっても背中を押す（最初の機会を設定する）必要が感じられる。実際、今回のインターン事業には、次に述べるように背中を押す効果があった。

インターン経験なしの学生の1人は、総合評価で非常に満足を選択した理由の自由記述で、「自分が経験したことのない保育を見ることができたからです。そこで新しい発見もありました。ぜひ、もう一度三瀬保育園を訪れたいと思いました。」と述べており、これからインターンを重ねていくきっかけになっている。当該学生は、高校生との交流を通して、「まだ2年生で将来について確定しているわけではないようでしたが、今回のインターンに自主的に参加していることが素晴らしいと思いました。」と述べており、高校生と合同で開催したことが刺激となり、自身の姿勢を顧みることに繋がっている。

また、高校生との交流に関しては、上記の学生のように刺激を受けた以外にも、以下に挙げるように、高校生の姿から自身の保育職への成長（着実な歩み）を感じたり、一歩先行く存在としての自覚を発揮したりする契機となっている。

- ・「私が今までどのように子どもと関わっていたのか、あるいは今もどう関わっているのかを高校生の姿を見ることで、客観的に振り返ることができた。今後の勉強に活かしていきたいと思う。」
- ・「高校生と大学生の交流があることで、私が高校の時に知りたかったことを話すことができた。」
- ・「高校生なりの考えをしっかりと持っている学生がとても多く驚いた。遊具で一緒に遊べたことで話しやすかった。」

なお、大学生が高校生から刺激を受けること、大学生が高校生のメンターとなることは企画立案時から期待していた。短時間の交流で一定の成果を上げる上で、上記3番目の学生が、遊具体験がアイスブレイクになったと述べていることは着目しておきたい。当初は、昼食後に遊具体験を行うプログラムであったが、手配していた弁当の到着が少し遅れたので、遊具体験を先に行った。第二章第一節で述べたように、タワー登りやタイヤ系遊具のレースで高校生と大学生は一緒によく遊んでおり、レースでは真剣勝負も行われたことで、昼食時の交流の会話のきっかけになったと考えられる。今後の企画においても、初対面の学生と生徒に交流を期待する上で、一緒に体を動かす遊具体験の時間配置に留意したい。

次に、大学生のアンケートでも、総合評価で「大変満足」が7人、「満足」が2人で、「不満」「大変不満」はいなかった。この満足度の理由として、「自らインターンに来るだけでは参加できない講話も聞くことができて多くを学べた。」「講師の先生の講話を聞きながら保育について考えることができた。」という自由記述があるように、実習や他園でのインターンを通して保育現場にそれなりに触れてきている大学生にとっては、見学や体験内容をその場で振り返る機会となった講演会が好評であった。高校生でも保育職のイメージの再構成が見られたが、大学生も次のような自らの保育観の再構成が見られる。

- ・「今まで大人が‘頑張れ’と声かけすることで、子どものやる気を促すと考えていた。しかし、それは子どもにとって自己判断の邪魔になってしまうのだと学ぶことができた。」
- ・「見守る保育がなぜ良いのか、根本的な理由を知ることができた。安全面での考え方が変わった。」
- ・「子どもが自分で決める大切さに気づくことができました。自分は結構子どもに関わりすぎるところがあるので、子どもの力を信じることも重要だと思いました。」

大学生に関しては、カリキュラム改編の影響で3年生の2人には授業内で教授できていないが、2年生と4年生に対しては、執筆者の担当授業内で、木村氏の講演会の内容の主要な要素は写真や映像を交えて教授している。執筆者の授業方法の反省が必要な面もあるが、見学・体験・講話を一貫して（連続して）行った今回のインターンの学びの深さが上記の自由記述には表れており、体験や学生自身による振り返りに止めず、講話や教員が関わる振り返りを合わせて行うことが今後のインターン事業でも重要といえる。

## おわりに

本研究の目的は、保育職を志望する高校生と大学生に、環境を通じた保育を探索している保育園でのインターンを合同で設定することの意義を明確にした上で、今後の課題を整理することであった。

第一章では、インターン会場園の三瀬保育園について、園周辺と園庭の環境、そこでの保育の様子を整理した。第二章では、まずインターンのプログラム構成と実際の様子を分析した。遊具体験が見学・講演内容を理解する上で効果的だった一方、見学の視点不足や見学時のルールの徹底などが課題として認識された。次に、高校生と大学生のアンケートを分析し、参加者の満足度が非常に高く、キャリアへの意識も高められているが、それは、見学・体験・講演を一貫して行ったことで、自らの子ども観や保育職のイメージを再構成する契機となったことが大きいといえる。学生や生徒は、たとえインターンの経験がなくても、自身の母園の記憶等から誰もが何らかの保育観を抱いている。その保育観を専門職としてのものとしていくためには、保育職を進路の選択肢と考えている高校生や養成校で目指している学生に対して、子どもへの愛情が深まる等、いずれ自身が親になることに効果が期待できるという観点からの子どもとの交流だけでなく、環境を通して行う保育の本質を理解し、自身の適性を見極められる内容のインターンが求められていると考えられる。つまり、従来の機会保証（量的拡大）に加えて、インターンの質的保証が求められるのである。

この点に関して、中学校の職場体験を対象としたものではあるが、職場体験を受け入れる保育現場の負担に比して、その長期化の職業としての保育職へのキャリア形成の効果に疑問を投げ掛ける山本の以下の論考は示唆に富んでおり、高校や大学のインターンにも該当する。

「送り出す側の教師は保育現場への体験志願者を『仕事として保育活動を考えているのかどうか』といった視点からチェックする必要があるだろう。そして同時に職場体験を受け入れる保育者は、『子どもとして参加する保育現場』と『大人が仕事として参加する保育現場』の違いを意識して、体験者である生徒に保育の仕事を伝える。両者がこの『保育される側』ではなく『保育する側』への視点の移行という目標で連携することが、保育職へのキャリア選択に有効な職場体験にするための教育的配慮となるだろう。<sup>(18)</sup>」

ただし、生徒（学生）には行動範囲の限界があり、高校の進路課には保育現場の十分な情報は蓄積されにくい。養成校・研究者には、インターン協力園の日々の保育の妨げにならないように十分配慮しながら、高校の進路課担当者に積極的に情報発信を行い、インターンの質の向上に向けて連携していくことが求められる。

なお、幼稚園や保育園は立地環境や園の方針により各園で多種多様な保育が展開されている。その中には、保育者が常に子どもの活動を取り仕切ったり、体験よりもメディア視聴が優先されたり、行事優先で子どものやりたいことよりも保育者のさせたいことが幅を利かせているように見受けられる園が少なくない。そのような園で実習したり、就職したりすることになる学生にとって、三瀬保育園のような園でのインターンが、失望や批判的な姿勢を培う危惧はある<sup>(19)</sup>。しかし、理念を持って保育の

向上を追求している園を知り、保育観を深める機会の提供を、インターンや授業等で引き続き行っていく。養成校教員の感覚としては、待遇の問題と並び、保育者が保育に魅力を感じられていない、保育観（理想像）のない状態が、今日の問題、早期離職や志願者不足を招いているように思えるからである。

本稿は、平成28年度東北文教大学学長裁量経費から補助を受けて進めた研究の成果を発表するものであり、日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学：2017年5月20日）において口頭発表したもの「高校生・大学生の合同インターンシップを通じた保育観の形成」に、新たな内容を加えて再構成している。

## 脚注

- (1) 藤田晃之「公立高等学校におけるインターンシップ（就業体験）の現状と課題」高校教育研究会編『季刊高校教育』45（10）2012年、30～33頁。なお、藤田の研究は保育職に限定したものではない。
- (2) 例えば、2013年7月放送のNHKクロズアップ現代では、首都圏の保育園での引き抜き、地方の養成校への求人訪問の実態が放送された。実際、養成校には新卒の求人依頼の他、年度途中からでも働ける卒業生の紹介依頼も多くあり、応えきれていない。
- (3) 宮内洋他「保育者養成校ができる高校生へのキャリアサポート－高大連携事業イベントでの取り組みから考える－」『高崎健康福祉大学紀要』第9号、2010年、105～113頁。
- (4) 二階堂邦子他「大学・附属高等学校・附属幼稚園との保育学習連携の試み－保健福祉コース保育選択者である高校生のふりかえりにおける学びの過程－」『日本女子体育大学紀要』44、2014年、112・119頁。
- (5) 指針等に示される「環境を通じた」保育の重要性を、保育者による環境構成の理論と合わせて示した興味深い研究としては、高山静子『環境構成の理論と実践 保育の専門性に基づいて』エイデル研究所、2014年。
- (6) 里山保育の先駆的実践園である木更津社会館保育園でも、自然物と起伏に富んだ園庭を重視している。斎藤道子『里山っ子が行く』農山漁村文化協会、2009年、108頁。
- (7) 鶴岡市が主催する森の保育研究会の中核園でもある。下村一彦他「山形県での里山保育の普及に向けた保育者養成の取組（2）行政機関・専門的指導者との連携を中心に」『東北文教大学紀要』第6号、2016年、29～46頁。
- (8) 時間の制約に加え、真夏の気比神社は、大量のやぶ蚊やマムシもいることから見学を見送った。保育園でも7・8月は神社に殆ど行かない。
- (9) ここでいう自由保育とは、「大地保育」に近いもので、一斉保育とは異なることは勿論だが、放任とも異なる。塩川寿平「保育に『公立』も『民間』もない“よい保育”とそうでない保育があるだけ」佐々木正美編『子どもと親が行きたくなる園』すばる舎、2010年、102・103頁。
- (10) 三瀬保育園は、「自分で考え自分で遊べ子どもたち」の理念の下で独創的な園庭



を創造してきた川和保育園（横浜市）に最も示唆を受けている。樹木等と融合した重層遊具、立体化も含めた複数の砂場や半屋外空間のウッドデッキの魅力に溢れ、めまい（高さや揺らぎ）を感じる遊具のリスクが適切に管理されている川和保育園の園庭は、多くの保育者を惹きつけており、全国の園庭創造の実践に繋がっている。川和保育園の園庭に学ぶ保育の向上に関しては、NPO法人 園庭・園外の野育を推進する会（<http://noiku.jimdo.com/>）の会報誌でも紹介されている。

- (11) 冬場は園庭が駐車場として使われていたため、園庭整備では園外の駐車場確保から始めている。
- (12) 三瀬保育園の保育改革については既に出版されているものもある。例えば、木村歩美編著『園庭の研究会』第1号、おおぞら教育研究所、2017年。
- (13) センス・オブ・ワンダーとは、「神秘さや不思議さに目を見はる感性」のことである。レイチェル・カーソン著／上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』1996年、23頁。
- (14) 【参考資料1：チラシ】に記載しているように、基本的に参加者は各校2名までとしていた。これは、総数の制約に加えて、参加者が大勢で固まることで保育見学时に保育の妨げになることを回避するためである。
- (15) インターン事業の時間が押した関係で、JRを利用して現地集合で参加した生徒の帰りの電車までの時間がなくなり、1人から回収できなかった。
- (16) 総合評価で「満足」を選択した他の2人の自由記述を以下に記載しておく。

「子どもたちが自分のやりたいことを自由にしていて、とても生き生きとしていました。私の通っていた保育園や一般の保育園とはちがって子供と深く関わったり過剰に応援したりしないことで生まれるメリットを学ぶことができました。」（インターン経験なし3年生）

「変に子どもに対して大人があおることで危険をまねくことがあると聞いておどろきました。とことん本気でとりくむことが、子どもたちに良い影響を与えるんだと思いました。」（インターン経験あり3年生）
- (17) 本生徒を含め、ここで自由記述を取り上げた2年生2人は、本学以外の養成校で保育者になることを目指している生徒である（他の生徒は本学が第一希望、ないし進路の選択肢）。山形県には養成校が3校しかない状況でもあり、自校への進学を希望しない生徒も対象にできたことは、地域の保育の向上に貢献する上で意義深いと認識している。
- (18) 山本睦「保育職におけるキャリア教育の課題：中学生の職場体験は保育職の職場体験に有効なのか」『常葉大学保育学部紀要』第3号、2016年、52頁。
- (19) インターン終了時の挨拶において、執筆者から、比較に基づく批判は誤解を招くだけであり、少なくとも具体的かつ現実的な代替案を示すことができる学びを蓄積してから提言できるようになって欲しいと伝えてはいる。

【参考資料1：山形県内の高校向け事業チラシ】

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 2016年度学長裁量経費企画事業

絶対保育者になりたい大学生・高校生の合同インターンシップ  
～山形で最も先駆的な保育環境の三瀬保育園（鶴岡市）に学ぶ一日～

【目的】

東北文教大学・短期大学部で保育者を目指して学んでいる学生10名とともに三瀬保育園を訪問する高校生が、優れた保育実践や背景にある理念を本格的に学ぶとともに、自身の希望進路の少し先を歩んでいる学生と語り合うことで、将来目指す保育者像の構築を図ることを目的としています。



【三瀬保育園】山形県鶴岡市の郊外にある定員60名の保育所です。徒歩圏内に海水浴場、スキー場、広大な寺社林などがあり、鶴岡市の森の保育事業の中核園となっています。その豊かな園外環境に加えて、平成26年度以

降、NPO法人園庭・園外の野育を推進する会のメンバー3名：木村歩美氏（子ども環境学会理事）、井上寿氏（子ども環境アドバイザー、一級建築士）、下村一彦（東北文教大学准教授）の助言を受けながら、地域住民や保護者との協働で創造性溢れる園庭も整備しており、子どもが主体的に遊び込める保育を展開しています。平成27年11月には子ども環境学会の園庭研究会（第22回：参加者は全国から約100名）の会場に県内で初めてなる等、全国の保育関係者から注目を集めています。



**【スケジュール】 2016年8月3日（水）**

※ 集合場所は三か所（希望を必ず申込用紙に記載して下さい）

7：50 東北文教大学ロータリー

8：20 山形駅西口 霞城セントラル前

10：20 三瀬保育園（現地集合：駐車可）

10：20～11：30 保育見学

11：30～13：00 昼食、園庭の遊具で遊んでみる

13：00～14：00 園外環境（海岸・里山）見学

14：00～15：30 木村歩美氏による講演会

15：40 三瀬保育園出発

17：30 山形駅西口

18：00 東北文教大学



**【申込について】 FAX**

※学年は問いませんが、1校につき2名（本学との高大連携協定校は4名）までとさせていただきます。進路等をご担当の先生も参加を希望される場合は、電話でお問合せ下さい。（引率を求めるものではありません。）

※参加定員は大学・山形駅集合（学園バス利用）が20名、現地集合が20名の合計40名。

※受付期間は7月20日までで、先着順とさせていただきます。

**【問い合わせ先】**

**【参加費】 1000円**

電話：023-688-2717

メール：k\_shimomura@t-bunkyo.ac.jp

昼食費・保険料の一部として、当日集合時に徴収させていただきます。なお、昼食ではアレルギー対応は致しませんのでご理解下さい。

**【留意事項】**

- ① 動きやすく汚れても良い服装で参加して下さい。（例）チノパン（ジーンズ）、ポロシャツ（ダメな例）ジャージ、下着の透けるTシャツ、プリントの派手な服
  - ② 帽子、着替え、水分補給用の飲み物、雨具、筆記用具を持参して下さい。雨天時は、保育見学を保育の映像記録鑑賞で代替しますが、雨具を用いて遊具見学等は行います。
- ※本チラシにある学会名称は、正しくは「こども環境学会」です。誤記載をお詫びします。



【インターン企画について】

(1) 総合評価

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

理由：

(2) 個別内容の評価

(あ) 保育見学

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

(い) 移動や昼食時の大学生との交流

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

(う) 園外環境の散策

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

(え) 園庭遊具の体験

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

(お) 木村先生の講演会

- ① 大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

【自由記述（上記以外の感想・要望・苦情など）】

※無記名ですから、質問や返答が必要な要望は直接大学教員にお願いします。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

【参考資料3：大学生アンケート】

## 三瀬保育園インターン アンケート（大学生用）

次年度以降の企画などに活用しますので、アンケートに協力して下さい。

(1) 大学入学後の保育園・幼稚園・認定こども園でのインターン経験

※ボランティアや職場体験も含めて答えてください。

- ① 今回が初めて                      ② 行ったことがある
- ③ 定期的（例：月に1回行っている、夏休みには必ず数日行っている等）に行っている

(2) 三瀬保育園の保育・木村先生の講演会について感じたこと・印象に残ったこと

※無理に褒めようとしなくて大丈夫です。「危ないから嫌だ」「保育者としてもっと子どもと一緒に遊びたいから私には合っていない」など、遠慮なく記載して下さい。

(3) 保育者を目指している高校生と保育現場で交流して感じたこと

(4) インターン企画について

- ①大変満足      ②満足      ③どちらでもない      ④不満      ⑤大変不満

理由：

【自由記述（上記以外の感想・要望・苦情など）】

※無記名ですから、質問や返答が必要な要望は直接大学教員にお願いします。  
質問は以上です。ご協力ありがとうございました。